

論壇

コロナ警戒しながら再開

コロナ禍で社会のさまざまな所に大きな変化があったが、大学のキャンパスではその変化が特に顕著だった。広いスペースを潤沢に取った大学のキャンパスであるが、そこに学生が全く見られなくなるとその光景は異様でもある。

教育はオンライン授業などで継続してきたが、朝から晩までコンピュータの画面を見つめるのはつらいと学生がこぼしていた。

そうしたキャンパスにも少し変化が出てきた。先ほどもグラウンドの側を歩いていると、顔見知り

伊藤 元重 (国際経済学) 学習院大教授

の学生がアメフトのトレーニングで汗を流していた。本当にうれしそうなお笑顔であいさつしてきたが、コロナで閉じ込められていた閉塞感から解放された喜びに溢れているようだった。

コロナ危機はまだ続いているが、大学では警戒は続けながら、グラウンドや道場での活動を解禁

キャンパスの正常化

し始めている。若い人たちがグラウンドを駆け回る姿を見て、これであれば大学ではないと思っただ。オンラインはいろいろなことができるし有効な教育の手段ではあるが、やはり学校は人が集まることにその存在価値がある。授業の方も新学期から少しずつ平常に

戻していくようだが、感染が広がらない中で正常化が進むことを願っている。

最近の社会科学の議論では、多様な人が交ざり合うことの重要性を指摘する研究が多く出ている。

大都市では、地域によつて所得格差や人種の分断が起こることを軽減するため、不動産価格の高い

地域にあえて公共住宅を建設し、そこに所得の低い人や白人ではない人種の人たちを住民として受け入れる。こうした都市施策は欧米のいろいろな都市で試みられているが、いろいろな形で好ましい成果をもたらしている。その地域の高所得層にとっても、違っ

たバックグラウンドの人と接することにメリットは大きいようだ。

人が交ざり合うという意味では、大学のもつ意味は非常に大きい。東京の大学には全国のいろいろな地域から多様なバックグラウンドの学生が集まってくる。そうした多様な若者がキャンパスという場で同じ時間を過ごすというところに意味がある。勉学に励むということはもちろん重要だが、スポーツや音楽などの部活に熱中することも重要だろう。

再認識した交流の重要性

そうした活動を制約しているウイルス感染は非常に深刻な問題である。ただ、人と交わることの重要性を再認識させてくれたという

意味では、貴重な機会を提供してくれたとも言える。私が見かけた部活に汗を流す学生たちは、仲間といっしょに汗を流す機会が本当に楽しいと再認識しているだろう。

さて、この先の展開はどうなるのだろうか。ウイルス感染がいつ収束するのか見えにくい状況である。ワクチンには期待したいが、新株が出てきてワクチンが有効かどうか不安もある。ただ、そうした中でも、世界全体で大学のキャンパスに学生が戻ってきたらいい。感染拡大には最大限の警戒はしつつも、可能な範囲で正常なキャンパスライフを取り戻そうというのだ。若者からキャンパスライフという貴重な機会を奪ってはいけない。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。